

経営多角化の取組事例 〔京都府京丹後市〕

1. 地域農業の状況

○ 京丹後市は京都府中心地より約90km程の場所に位置し、市の総面積502km²のうち、山林が377km²(75%)を占め、山林の間を縫うように河川が流れ、河川沿いの細長い平野や海岸沿いの平野に農地及び集落が分布しており、これまで主に米、野菜、果樹、乳用牛などが生産されてきた。



○ 担い手の高齢化が進んだ事や、鳥獣害による生産意欲の低下等により、担い手不足が進み、山間部の田畑を中心に農地の荒廃が課題となってきた。

○ 日本海に面した京丹後市網野町では、砂丘地を利用した農業が盛んに行われている。中でも、同町浜詰一帯で栽培されるさつまいもは「丹後砂丘かんしょ」として出荷販売されている。

耕地面積	2014年	4,880ha
田耕地面積	2014年	3,740ha
畑耕地面積	2014年	1,140ha
総農家数	2010年	3,692戸
自給的農家数	2010年	1,302戸
販売農家数	2010年	2,390戸

資料：耕地面積統計、農林業センサス（農林水産省）

2. 耕作放棄地再生利用の取組

取組主体	AFグループ(甘藷部会)	地区名	浜詰(はまづめ)、網野(あみの)1、湊宮(みなとみや)地区
再生面積	0.95ha	取組年次	平成24～25年
作付作物	かんしょ	販路	JAIに出荷

(1) 甘藷部会(AFグループ)の取組み事例

○ 京丹後市のAFグループ※は、ユリ(花き)の営農を中心とした農業者団体であるが、平成23年に経営の多角化について検討を重ね、下記の利点から裏作として、甘藷部会を立ち上げかんしょ栽培を始めたものである。

※ 網野町の花き農家グループの略称

【新たにかんしょ栽培を決めた経緯】

- ① 繁忙期が重ならないこと
- ② 球根の保冷施設を活用することにより出荷時期をずらし、価格面で有利に販売することができること
- ③ ユリの出荷で培った販売ノウハウが生かせること

新たな品種導入に当たっての課題は農地の確保であったが、同グループは耕作放棄地再生利用緊急対策交付金を活用し、荒廃農地を再生させる事により確保した。

近年では砂丘かんしょの独自ブランドである「まいこ金時」の売れ行きが好調となっていることから、更なる規模拡大の推進を目標としている。



【再生前】



【再生後の耕起作業】



【まいこ金時】

活用した支援策

H24～25 耕作放棄地再生利用緊急対策交付金(国)再生作業(含重機)／施設等補完整備)